

「革命前後」 (火野葦平) 其の一

大東亞戰爭末期、B二九が連日福岡にも來襲してゐた頃、帝國陸軍西部軍の報道部宿舍「川島ホテル」には東京や九州から報道部員として召集された文化人達が屯^{たむ}ろしてゐた。小説家、詩人、演劇人、畫家、學者等々、多士濟々で、住民の戰意高揚と軍への協力態勢強化が任務だったのが、實體は「化物屋敷」、「梁山泊^{りやうざんぼく}」、「烏合の衆^{うがふ}」と評される様な有様であつた。演劇人高井多門の様に「お國のためにすこしでもお役に立」ちたいと本氣で考へる者もゐたが、「なにもしないでブラブラして」、「報道部を食ひつなぎの腰かけにして」、それどころか「軍を笠に着て、なにか悪事を働いて」ゐるとしか見えぬ手合も少からず、「こんな組織を作つてなんの役に立つのか」と、主人公の小説家辻昌介は不安を懷かざるを得なかつた。

そしてそれら魍魅魍魎^{ちみまうりやう}の巢食ふ報道部を舞臺として、ポツダム宣言の發表、廣島長崎への原爆投下、ソ聯軍の參戰、天皇の重大發表と續く急迫せる戦局下、「高邁^{かうまい}と低劣との錯綜」した

混迷^た畜^たならぬ日本人の生の姿が作品前半に於てまづは描かれる事になる。何しろ全體で原稿用紙ほぼ千枚に及ぶ長篇であり、印象深い箇所は數々あるが、今回は前半に於て特に強く心に殘る次の一箇所のみを紹介する。

長崎への原爆投下直後、長崎に調査に赴いた畫家とカメラマンの報道部員が戻つて來て、慘狀を傳へる繪と寫眞とを仲間を示すと、皆は震へ上つて「ほとんど寫眞を正視出來る者がなかつた」。しかも長崎の原爆は廣島のよりも小型だといふのだから、廣島の凄慘が思ひ遣られ、「この殘忍無類の兵器に對して、人々は恐れともにはげしい怒りに燃え」、「人間のやることぢやない。まつたく惡魔のしわざぢや」と、何人もが「呻^うくやうにしてこの言葉を吐いた」。

處が、赤根一郎といふ報道部員は「せせらわらつて」かう云つた、「諸君、それはセンチメンタリズムだよ。戰爭にヒューマニズムも糞もあるもんか。戰爭そのものがすでに殺しあひを前提としてゐる惡魔のしわざなんだから、殺し具合の良し惡しを論ずるなんて愚の骨頂さ。(中略)日本だつて、先に原爆を完成してたら使ふに決まつてる。その證據には風船爆彈なんかをアメリカに飛ばしたぢやないか。日本だつて『ピカドン』を持つてたら、ワシントンか、ニューヨークの空で炸裂^{さくれつ}させるんだ。そしたら、諸君は日本を惡魔呼ばはりするかね。さうす

れば勝つとわかつてゐるとき、負けてもいいから、それはやめようといふかね」。

この發言に皆は黙り込んだ。昌介は考へた。兵隊として戰場を何度も疾驅しつুকした自分は己れが「鬼になつたと自覺した」事も、「無意識のうちに鬼と化してゐた」事もあつた。「衷心から祖國の勝利を願つて威力絶大な「特殊爆彈の發明にも快哉くわいさいを叫んだ」が、「特殊爆彈」こそは取りも直さず「ピカドン」ではないか。「さすればその使用者を責める資格はないことにならる」。「惡魔は自分の中にある。赤根一郎の言葉には恐ろしい眞實がある」、昌介はさう思つて戰慄した。

實は赤根は以前高井多門によつて「品性劣等な奴が立派な意見を吐く」、「人間て奴は面白い」と評された男なのだが、赤根の如き卑劣漢のシニクスの口にする「恐ろしい眞實」にも、昌介即ち作者火野葦平は己が道義の問題として眞つ向から向合ふのである。そして、洋の東西を問はず、全うな作家が常に信じてゐる様に、「惡魔は自分の中にある」のであつて、これ程確かな眞實は無いが、敗戦後日本人がこれ程ないがし蔑ろにしてゐる眞實も無い。後半で専ら描かれるのは敗戦國民の「道義の頽廢と節操の缺如」である。(「革命前後」、中央公論社)